

ポスト「五四」時代のジェンダー論 — 「新女性」・「モダンガール」言説を中心に—

呉 桐

1. はじめに

「新女性 (new woman)」と「モダンガール (modern girl)」は、世界規模の文化連鎖性・同時多発性を示す近代的女性像として、注目されてきた (Margaret and Heilmann eds. 2004; Modern Girl Around the World Research Group 2008; 伊藤ほか 2010)。一般に、両者の間にはつながりが認められていると同時に、世代差もあると考えられている。すなわち、教育権や職業権を求め、公的領域へと参加する先駆者としての「新女性」世代が先に存在し、その後、消費文化を享受し自由奔放な「モダンガール」世代が生まれたということである。例えば、日本において、「新婦女」や「新しい女」をめぐる議論の展開と、「モダンガール」という語の流行の間にはかなりの時間的隔たりがあったため、「両者ははっきりと断絶したものとして受け止められた」(牟田 2010: 156)。

中国の場合、「新女性」¹⁾は 1910 年代末に現れ、20 年代の半ばまで続く五四新文化運動において、その影響力を拡大していった (楊 2016)。一方、1920 年代末から 1930 年代にかけて、上海などの都市部においては消費文化の浸透により、「モダンガール」²⁾のイメージが、さまざまなメディアを通して構築されていた (伊藤ほか 2010)。ただし、両者は出現した時期にタイムラグこそあれ、断絶しているわけではない。下記の図 1 は、データベース「民国時期期刊全文数拠庫」をもとに筆者が作成した、五四運動の始まりである 1919 年から日中全面戦争が勃発した 1937 年までの間、タイトルに「新女性」関連の言葉を含む雑誌記事数の変化を示した図である。「新女性」に対する関心が継続しており、五四後もその言説は下火になることはなく、むしろ一定程度増加していたことが見て取れる。

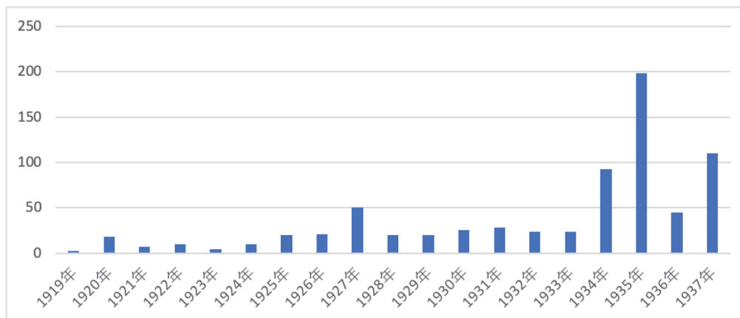


図 1 タイトルに「新女性」「新婦女」「新女子」を含む雑誌記事数³⁾ (1919-1937)

むろん、記事数の増加は、1930年代における出版産業自体の繁栄とも関連している。しかし、そもそも五四新文化運動が退潮した後も「新女性」が流行語であり続けたのは、どのような社会的状況を背景とし、どのようなイメージによって支えられていたのだろうか。

これまでの研究では、一方、「新女性」のイメージは、1920年代後半に都市部で開花した消費文化に接収される形で、五四運動期の教養を持つ自立的な女性像から、奢侈と逸楽の象徴へと変化していった(何 2004; 陳 2006)。それは同時期に流行り出した「モダンガール」のイメージとも重なっている。他方、「新女性」は従来の進歩的な含意を完全に失ったわけではない。特に女性の個人主義を国や社会のための集団主義へとつなげる点において、そのイメージはしばしば、「真のモダンガール」が追求すべき理想だとみなされていた(許 2011)。

要するに、ポスト「五四」時代における「新女性」と「モダンガール」のイメージは、緊密な関係を持ちつつ、両者とも、否定と肯定、廢頹と進歩の両極の間で揺れ動く多義的な様相を呈していた。このような2つの女性像を分析することは、当時の中国におけるジェンダー論の振幅にアプローチできるだけでなく、「新」や「モダン」に託された近代化への思いを、ジェンダーの視点から斬り込むことにもつながる。

上記の問題関心のもとで、本稿が主に着目するのは、1930年代の女性誌である。この時期、中国では女子教育の急成長により、女性向けの読書市場が拡大した。通俗性の高い女性誌が次々と創刊され、誌面には「モダンガール」や「新女性」をめぐる言説が散見される。これらの言説は、婦女解放論が「一般大衆にもポピュラーになってしまった」(陳 2006: 236)という時代状況を反映するものであり、ジェンダー論の担い手が男性から女性へ、女性の中でも知識人から一般女学生へ、という当時の女性誌界における大衆化の始まりを捉えるための重要な素材である。したがって、本稿では、1930年代の中国における代表的な女性誌である『玲瓏』を取り上げ、そのなかの「モダンガール」と「新女性」に関する言説を検討する。具体的に、「モダンガール」言説(174件)を主軸に、「新女性」言説(22件)と合わせて考察を進めていく。

次の第2章で、先行研究の検討を行った上で、第3章では『玲瓏』の誕生した背景と誌面性格を確認する。そして、第4章では具体的な女性像の分析に進み、第5章で考察を行いたい。

2. 問題の所在

「モダンガール」と「新女性」という2つの女性像の関係性について、先行研究から主に2つの視点が得られる。

1つは、両者の世代差を強調する視点である。「新女性」研究の多くは、1920年代を中心にノラに代表される「新女性」のイメージを論じ、それが1920年代末から消費主義化していくことに言及している(Wang 1999; 許 2003; 陳 2006)。時を同じくして「モダンガール」が出現し、消費社会のシンボルとなっていくことを考えると(羅 1996)、両者の間には重なる部分が大きかったと考えられる。だが、イメージ転換後の「新女性」の具体像と「モダンガール」との関係性がしばしば論じられてこなかった。両者はそれぞれ時代限定的な女性像として検討されてきた傾向がある。

もう1つは、「新女性」と「モダンガール」の包含関係を強調する視点である。代表的な研究としては、日中戦争以前の「新女性」言説を賢妻良母期、ノラ時期、職業婦人期、モダンガール

ル期、そして労働婦人期に分け、時系列に沿って分析した江上幸子(2006)が挙げられる。1920年代に限定せず、「新女性」を可変的でより広い含意をもつ女性像として捉える点で示唆的な論考である。この点において、本稿も同じ立場を取っている。ただし、「新女性」を上位カテゴリーとするよりも、本稿では「新女性」と「モダンガール」をめぐる言説が、いかにつながりを持ちつつ展開されていたのかについて検討する。両者における意味の異同や相互参照性を分析することで、ポスト「五四」時代におけるジェンダー論の一端を明らかにしたい。

1920年代末頃から、五四運動に対する反省を含め、知識人のジェンダー観が大きく方向転換した。「新女性」の代表格だったノラが青年たちの憧憬の対象ではなくなり、女性は「再度家に戻り『国民の母』となる」(陳 2006: 217)ことを要求されるようになった。こうした「復古反動主義」を象徴的に示す事件として、1930年代半ば頃に起きた「婦女回家(女は家に帰れ)」論争が挙げられる。要するに、ポスト「五四」時代において、女性の中心的役割に対する認識が、社会から家庭へと転換していく傾向にあった。

この時期のジェンダー論に関して、女性の家庭的役割と社会的役割との葛藤をめぐる議論の分析が多く蓄積されてきた(前山 1993; 岩間 2006; 江上 2007)。これらの研究から、1930年代というのは「新賢妻良母」、「超賢妻良母」、「賢夫良父」のように、男女の家庭役割や職業役割をめぐる様々な意見が出された時期であることがわかる。ただ結果的に、性別役割分業について、「結論のでないまま、中華民国は革命と戦争の時代へと突入していった」(小浜 2018: 14)。

これらの研究は戦前期中国の性別役割分業を理解する上で非常に重要である。分析のなかで、賢妻良母や主婦、職業婦人などの女性イメージも多く取り上げられている。しかし、それらに比べ、本稿で注目している「新女性」と「モダンガール」はしばしば、家庭や職業をめぐる性別役割分業の問題だけでは捉えきれない側面がある。結論を先取りすれば、五四以降、性差を超越した普遍的人格をもつ「新女性」のイメージが後退し、『母性』を介した女性性への意識が高まった(坂元 2004: 121)と言われているが、『玲瓏』のような通俗的な人気女性誌では、それとは異なる次元で、外見的魅力の肯定による女性性への意識の高まりも見られた。「新女性」イメージはこうした意識のもとで再編成される面もあったのである。

次章では、『玲瓏』の誌面性格およびその誕生の背景を把握しておく。これまで、『玲瓏』誌上の新しい女性像を総括的にまとめる研究があるものの(何 2010; 孔 2011)、五四新文化運動までを視野に入れ、女性像を編成した言説の仕組みについては詳細な考察がなされていない。

3. 女性誌『玲瓏』の誕生

1928年の南京国民政府の樹立から、1937年に日中全面戦争が勃発するまでの10年間、比較的安定した政権のもとで、上海をはじめ中国の都市部では大衆消費社会の到来を迎えた(岩間 2012)。それに伴い、出版文化も大きく発展した(宋 2000)。

当時の女性向け刊行物のなかで、刊行期間が長く、発行部数も多かった代表的な存在が、女性週刊誌『玲瓏』である。同誌は1931年3月に三和出版社によって上海で創刊され、1932年の上海事変による一時停刊を除き、1937年の戦争勃発まで絶えることなく刊行を続けていた。同時代のほかの女性誌と比べ、かなり「長寿」であった⁴⁾。発行部数は毎号当たり2万部であ

り、予約購読者に約 3000 人がいた（許 1936；何 2010）。当時、出版の中心地である上海で 2 万部以上の販売部数を達成した雑誌はわずか 12 種ほどであり（胡 2000）、女性誌のなかで『玲瓏』は一定の商業的な成功を収めたと言える。五四期の代表的な女性誌である『婦女雑誌』（1915-1931）は、最盛期でも印刷部数は 1 万部を超える程度であった（陳 2006）。

1930 年代に女性誌市場が拡大できたのは、女子教育の進展と大きく関わっている。1923 年という五四運動の末期において、中国では半分の省級行政区に女子中等学校がなく、全国の女学生数も 3 千人程度にとどまっていた。一方、1930 年の教育部の調査結果を見ると、その数が 3 万人を超え、さらに翌年の調査結果では 5 万 6 千人へと急拡大していた（程 1936）。これに同時代の職業教育・師範教育・高等教育の拡大を加えれば、活字メディアの読み書きが可能な女性層はさらに膨れ上がる。『玲瓏』が創刊したのも、ちょうどこの新しい読者層の登場と重なり、市場に対し敏感に反応した結果だったと言える。当時の女学生が『玲瓏』を愛読していた様子について、女性作家張愛玲は、「1930 年頃の女学生なら誰もが一冊を手にとった」（張 1944: 16）と振り返っている。

一方、女性誌の読者層の変化は量的な面はもちろん、質的な面においても根本的な転換があった。五四運動期では女子教育の規模が極めて限定的だったため、女性誌の編集から購読までが、男性知識人主導で行われることが多かった。有力な女性誌は啓蒙色が強く、しばしば男性知識人が「婦人問題を共同に研究する場」（陳 2006: 145）として機能していた。先に述べた、1920 年代初頭における 3 千人余りの女学生数と、1 万部以上にも上る『婦女雑誌』の印刷部数との落差からも、その状況が理解されよう。もっとも婦人問題を語ることは、中国では「新文化」を身に付けていることの証左となるため、男性知識人たちは、それによって近代国民としてのアイデンティティを誇示しようとした（Wang 1999）。

1920 年代末期になると、女子教育の発展に伴い、女性誌の読者層は男性から女性へと傾斜し始める。それと並行して、女性誌の誌面における大衆化も進んでいく。五四時期を代表する『婦女雑誌』は、早くも 1920 年代半ばに「ソフトな読み物」へと編集方針を転換した。1928 年、良友出版社から『今代婦女』（1928-1931）という中国で「本当の意味での最初のファッション誌」（趙 2010: 91）も出された。この流れのもとで、『玲瓏』は「社会の高尚たる娯楽を提唱し、婦女の優美な生活を増進する」（1931: 34）⁵⁾ことを創刊の趣旨に掲げ、同じく娯楽重視の姿勢を示した。誌面ではモダン色に徹しており、映画、流行曲、ファッション、スポーツ、インテリア、化粧品、美容法など、ありとあらゆる最新の流行情報を集めていた⁶⁾。

こうしたモダン文化重視の編集方針は、衣食住や余暇などの生活面にとどまらず、思想面にも及んでいた。先行研究が指摘する通り、五四運動が終息した後も、女性誌界では「五四新文化運動時期の女性論の成果を反芻し、意味の再生産を行う」（陳 2006: 159）動きが見られた。ジェンダー論がポピュラー化していくなか、『玲瓏』の誌面には「自由交際」や「社交公開」といった五四運動期のスローガンが散見される。ただし、それらは抽象的な啓蒙論よりも、女性の日常実践に寄り添った、ある種の知的ファッションに近い。本稿が注目する「モダンガール」や「新女性」をめぐる言説も、その域を出るものではなかった。

また、『玲瓏』は女性読者との双方向的なコミュニケーションを重視していた。創刊当初から、「本誌が女性唯一の代弁者である」（陳珍玲 1931: 147）ということを手を主張し、誌面には「姉妹たち

の意見を歓迎している」(陳珍玲 1931: 327) といった、女性編集長陳珍玲の呼びかけがしばしば見られる。また、創刊の動機について、創刊者は「完全なる婦人刊行物を作り」、「これにより語りたいけど語る機会がない婦人たちも、意見表明の場が得られる」と、女性のために発言の場を提供することを明言している(林澤蒼 1933: 935)。こうした強い編集意識のもとで、内面世界の開示や、物事に対する意見表明をする女性読者の投稿が多く掲載されていた。

このように、『玲瓏』はポスト「五四」時代に起きた女性誌界の変動——読者層の質的・量的な変化と書き手のジェンダー的再編——を如実に反映している女性誌である。上海で刊行されていた同誌の販売網は中国の国内主要都市、および華僑の集まる東南アジア地域に及んでいるが、都市と農村との巨大な格差、また広範な販売網の割に規模の限られた読者層を考えれば、この女性誌は同時代の雑誌メディアと同様、地域性・階級性を持っている。ただし、1930年代における中国の都市女性が持つジェンダー意識の自己表明を考察する点で貴重な資料となる。

4. 『玲瓏』のモダンガール論

4.1 「モダン」vs「旧」

創刊時に「モダン青年のマニュアル」と繰り返し自己宣伝していたことから、編集側が「モダン」をポジティブな意味で捉えようとしていたことが明らかである。当時、社会進化論の影響が根強かった中国社会において、「新」の価値は揺るぎがたいものであった。そのため、『玲瓏』誌面上の「モダン」言説もしばしば「旧」との対比により「新」の側面を強調することで、肯定的なイメージを獲得することに成功した。

最も多く見られたのは、「旧式家庭」や「旧式結婚」に対する容赦ない批判と、それを打破した「モダン青年」の承認である。例えば、1931年16号に掲載された「氷炭相容れずの旧式/モダン家庭」と題する文章は、旧式の大家族によく見られる「人数が多いため、意見の契合が難しく、感情の破綻を免れない」という点を指摘したうえで、モダン青年の築いた「モダン家庭」の優れた点を、「旧式家庭」と相反する面において捉えている。

モダンな家庭は、人数が少ないため、意見が統合しやすく、打ち解けた雰囲気の中で団結の精神も育まれやすい。また、遺産相続がなく、みんなが自立の精神のもとで、生産能力を伸ばし、自給自足を目指している。家庭の人数が少ないとはいえ、国のために力を尽くすことができ、正業にも就かずただ財産を食いつぶしている大家族とは違うのだ。当然、提唱に値する。(月芳 1931: 556)

ここでいう「モダン家庭」とは、「大家族」と違い、夫婦と子どもを中心とする家族形態を指している。当時、一般に「小家庭」という言葉が用いられていた。清末期からの「家庭革命」の進展に伴い、中国においても「近代家族」イデオロギーが「小家庭」という名のもとで模索された(江上 2018; 趙 2020)。実態レベルではまだまだ中国社会の主流には至らないにしても、モダンな家族形態の一つとして注目され続けたのである。都市部では西洋的な結婚儀礼がブームとなっただけでなく(岩間 2012)、居住面においては、小家庭をモデルに設計された近代合理的な間取りも多くの青年たちを惹きつけた(孫 2017)。『玲瓏』における「婚約・結婚前の準

備：モダン青年必読」（日明 1931: 522-3；日明 1931: 560-1；日明 1931: 599-600）といった連載や、インテリア・デザインに関する盛りだくさんの紹介（1931: 375; 1932: 214; 1932: 215）が、そうした新しい需要に対応するものだったと考えられる。

「旧式家庭」を打破し、「モダン家庭」を築く上で、当事者である「モダン青年」たちの努力は欠かせない。特に女性の場合、より覚悟が求められた。例えば、銀珠という女性読者の投稿は、「モダン」と「旧」の対立を踏まえながら、旧式の結婚について「女性を束縛する罍である」と論破している。旧式の結婚では、女性はただ男性が「欲望をぶちまけるための機械」として扱われており、「人格が侮辱されている」と彼女は述べている（銀珠 1931: 452）。こうした「旧」環境における女性の受難を強調する論法は、一世代前の五四新文化期にも見られた。ただ、1930年代になると、「新/旧」の二元対立を踏襲して「モダン/旧」という認識が新たに台頭したのである。

一方、反面教師として、旧式の結婚にこだわる女性の具体例も掲載されていた。一例を見てみると、事件・犯罪を評論する「案件評述」欄において、「旧礼教のもとで犠牲となった女子」が取り上げられている。事件を要約すると、「世の中のモダンな雰囲気染まってい」ない貞淑な性格をもつ少女が、幼時に親によって取り決められた相手と婚約した。だが、男性側の気が変わり結局婚約を破棄され、恥辱に感じた末に死を選んだ。興味深いのは、この悲惨な事件に対する評者の論である。

譚女（当事者である女性——筆者注）の死に対して、われわれは可哀そうに感じている。しかし、その自殺の理由に関しては、同情どころか、反対したいと思う。……我々から見て、譚女の所謂礼教を守り、母訓を宗とし、人格を保って自らの価値を高めることが、自殺の理由になるとは思えない。彼女は陳腐な信条を妄信するあまり、人間としての真の意義を理解していない。その死はただ旧礼教のための無意味な犠牲でしかない（呉如珍 1933: 407）。

「女性の唯一の代弁者」であることをアピールしている『玲瓏』でさえ、途方に暮れた「旧女性」に対しては、その身になって考えるどころか、容赦することなく糾弾した。つまり、一言で女性と言っても、実際に擁護されているのは伝統的な生活様式から脱出した女性である。ここでは、「モダンな雰囲気染まってい」ないことは、何も自慢できることではなく、むしろ時代遅れだと読者には感じられるだろう。

では、「旧女性」のイメージと対置される「モダンガール」にはどのような特徴があったのか。『玲瓏』において、「旧女性」が儒教的な家父長制に従属的で、親の言いなりに結婚する存在であるのに対し、「モダンガール」は配偶者選択権を持ち、かつそれを積極的に行使する存在であった。読者通信欄では、何人かの恋愛候補や結婚候補のうち、誰を選ぶか迷っている女性読者の投稿が散見される。「モダンガールの質問」という悩み相談の投稿において、女性読者愛娜は、遊び好きだが自分と合う青年と、穏やかで頼りになるが少し年上の男性の間で、どちらのほうと結婚へ進むべきか、意見を求めている（愛娜 1931: 1341）。それに対し、編集側は丁寧に状況を分析したうえで、年上の男性を勧めたが、「私見を述べてきたが、取捨選択はあなた自身に

任せる」と付言している。指導的な立場ではなく、読者の自主性を尊重する編集側の態度が窺える（陳珍玲 1931: 1342）。

ほかにも、「モダンガールへの提言：ある女子の経験談」では、まず冒頭で「現在の少女たちは、愛の河の中で沐浴し、意中の人を探さない人は一人もいない」（王明星 1931: 1331）とあり、自分で恋愛相手を決めるのが当時の若い女性たちにとってごく当たり前のこととして記載していた。そして投稿者は、自らの経験に基づきながら、特に特技がない、「普通の男性」を相手にするほうが最も幸せになれると主張している。

このように、恋愛・結婚に対する自己決定権の有無によって、女性を分断する論理が『玲瓏』において形成されていた。「モダンガール」は「旧女性」に比べ、断然、進歩した存在だとみなされ、好意的に捉えられていた。少なくとも「旧女性」と対立する点においては、「新女性」と共通する部分があった。では、実際に両者の関係性はいかなるものだったのであろうか。

4.2 「モダン」vs「新」

女性の配偶者選択権が注目され始めたのは 1930 年代ではなかった。五四新文化運動期に知識人たちは優生学の理論に基づき、優良な結婚相手を選ぶことが中国人の遺伝的素質の進歩につながると主張していた。この主張はまた、同時期の婦人解放運動を促す思想的リソースの一つにもなっていた（Barlow 2004）。事実、1920 年代初頭から、結婚相手の条件を明記した求婚広告を新聞に出す中国人女性が少なからずいた（高嶋 2009）。このような文脈において、前節の「モダンガール」言説は、五四新文化運動と、その時に生まれた「新女性」の延長線上に位置付けることができる。

しかし、同じく旧道徳から解放され、女性の自由意志を体現しているからといって、「モダンガール」と「新女性」を直ちに同一視することはできない。当時の言論界では、モダンガールをめぐる議論は「批判一辺倒」の状況にあった（江上 2007）。『玲瓏』にもモダンガールを批判する声は多くあった。具体的には、モダンガールの消費性・奢侈性に対する不満（沈怡祥 1931: 255-6; 陳跡 1933: 644）や、モダンガールをエロティシズムと結びつける議論（鄭筠潔 1931: 620-1; 呉心醒 1931: 879; 薇 1933: 1593-4）、さらに、時局に鑑みてモダンガールの亡国的な側面を強調する記事が見られる（侯徹 1932: 1752-3; 許雄群 1934: 648-9）。

批判の着目点はまちまちだが、これらの否定的な言説では、「外見」と「内面」といった対立項を強調する論法が、繰り返し登場していた。象徴的な一例として、「永遠不滅の美」という投稿では、「飾り付ける時間を決して内面の修養に使おうとしない」モダンガールのことを非難し、「外見の一時的な美のために、永遠不滅である内なる美を遮ってはいけない」と忠告している（蔣麗貞 1931: 1446）。ほかにも、これと似たように、モダンガールをめぐり、外見を着飾ることを重視するあまり、内面の思想性に欠ける嫌いがあると批判する発言がある（李瑞瓊 1933: 1088; 劉異青 1933: 2439-2440）。

このような皮相的なイメージは「新女性」に関する言説にも見られるものである。外見の追求に明け暮れた「新女性」について、批判的なまなざしが向けられている。

我が国において、五四運動以来、「婦人解放運動」は一時期センセーションを巻き起こし

た。ここ数十年の間、彼女たち（新女性——筆者注）は社会において、確かに相当な努力をしてきた。そして、今までに得た結果からすれば、彼女たちは確かに以前よりかなり解放されており、かなり自由になった。しかし、残念なことに、彼女たちの歩んでいる解放の道は間違っていた。その自由はあまりにも無制限なものになってしまっている。事実、現在多くのいわゆる「新女性」が求めている目標は、服飾の美化であり、生活上の奢侈である。その奢侈に対する欲望を叶えるために、身売りをしても惜しくないようだ。このような女性は、根っからの「新女性」とは言えない。（蓮 1936: 3328-3330）

このように、「新女性」の言説には、五四運動およびそれが内包する婦人解放運動を回顧しながら、現在の女性の問題点を指摘するものがあつた（陳珍玲・左企 1932: 339-342；記者 1935: 645-6）。その問題点はしばしば「服飾の美化」や「生活上の奢侈」といった外的側面に集中しており、同誌のモダンガール批判とも重なり合っている。一方、そうした「新女性」が誤った解放の道歩んでいる存在だと見なされていることは、言い換えれば、その言葉に、過去の婦人運動を理想とした、ある種のノスタルジーが投影されているのではないだろうか。

この点は、「新女性」への期待を示した記事にいつそう表れている。例えば、「新女子の責任」について、許嫻淑は「一方では、旧礼教下の旧婦女を解放し、他方では、自由に酔心し平等を誤解した新式の婦女を正す」（許嫻淑 1935: 519）ことにあるとした。「自由に心酔し平等を誤解した新式の婦女」というのは、まさにモダンガールの批判言説に通底する表現である。ここで、「新女性」は「旧女性」と「自由に心酔し平等を誤解した新式の婦女」の両方の導き手とされていることから、それにかけられた期待の大きさと、イメージの優位性が窺われる。

事実、1920年代の半ば頃から「新女性」の外見を問題視する言説が現れ、そのイメージが一時期低落した（何 2004）。しかし、1930年代になると、「モダンガール」の社会問題化に伴い、女性の外見問題はモダンガール現象と強く結びつけられるようになった。それに対し、「新女性」は、良き過去へのノスタルジーを内包しながら、期待に値する女性としてイメージが再編されていった。つまり、「旧女性」と対立する点において、「モダンガール」は「新女性」と同様に評価されているが、外見重視という点においては、「新女性」を継承しているどころか、その真義を誤解した「変異種」として扱われることもあつた。

ところが、『玲瓏』のなかの「モダンガール」批判は、単に過去にも起きた「新女性」の外見批判を焼き直したものではない。次節では、ポスト「五四」時代の新しいジェンダー論としての「モダンガール」論と、それと連動した「新女性」への新たな意味の付与について見ていく。

4.3 「外見」をめぐる論理

「外見/内面」という対立項に基づくモダンガール批判は、当時の言論界でよく見かけるものであつた。ただし、『玲瓏』において、モダンガールの外見重視を批判する言説には、少なくとも2つの異なった論理が存在しており、詳しく検討する余地が残されている。

女性が外見を磨くことは、一般的に性的魅力を引き立てることにつながると認識されていた。ゆえに、これを理由に、一部の論者は、モダンガールの性的逸脱を問題視した。それらの言説では、綺麗に着飾っているモダンガールは、「既婚の男性の気を惹く」（劉玉瑛 1931: 681）こ

ともあり、「甚だキレイ、甚だモダン」にもかかわらず「甚だ嫁ぎにくい」（志勤 1931: 332）存在だと描写されている。すなわち、外見的魅力の高いモダンガールはしばしば、当時における一夫一婦の異性愛制度へとスムーズに移行できない存在としてイメージされているのである。この点に関しては、交友範囲の広い彼女に不満を述べている男性読者の投稿も例として挙げられよう（羽仙 1931: 522-3; 言絲金 1935: 3419-3420）。

しかし、婚姻制度やそれにつながる性別役割分業からの逸脱を懸念する議論がある一方、日常的な異性との関係における女性の抑圧を問題視する声も同時に存在していた。例えば、「モダンガールの装飾」と題する投稿は、「外見の美しさを追求している多くの女性の目的は、異性に媚びを売ることにある」と断罪した上で、「これはなんて悲しいことだろう」と嘆いている（薇 1933: 1594）。同様の指摘は女性読者劉異青の文章にも見られる。劉は、「美を追求するのは人類共通の欲求」と認めているが、現在のモダンガールたちは「ただ異性を惹きつけるため」に行なっていると非難している（劉異青 1933: 2439-2440）。ほかにも、モダンガールの外見重視を、「男性への屈服」（1934: 1764）や「男性に対する媚び売りと機嫌取り」（1935: 1513）と関連づけて批判する論者がいた。つまり、これらの議論が共通して問題にしているのは、女性が外見を磨くことにより獲得した性的魅力が、非対称な男女関係を強化・固定化するのではないか、ということである。

要するに、一見共通してモダンガールの外見重視を非難しているように見えるが、実は異なる2つの論理のもとで言説が編成されている。1つは、既存の一夫一婦制の異性婚制度を維持すべく、それを攪乱する危険性をもつモダンガールの性的逸脱を問題視している。そして、もう1つは、性的規範からの逸脱よりも、外見的魅力の強調によって女性が従属的なジェンダー関係に陥りかねないことに対する批判である。言い換えれば、前者では婚姻制度そのものの維持に重点が置かれているのに対し、後者はそれを無視しているとまでは言えないにしても、制度面よりは、男女の交際実践における女性の地位の確保をより意識しているのである。

『玲瓏』では、どちらかという後者の論理が前者を圧倒し、議論が展開されていた。先に言及した、彼女の交友に文句を言う男性読者の投稿に対しても、編集側は「少しだけ不謹慎なところがあるにしても彼女の長所をすべて抹殺すべきではない」（陳珍玲 1931: 525-6）、「彼女を正しい道に導くために、学問に努め、再び男性に誘惑されないよう、勧めてください。もしあなたが彼女のことを教育できない存在だと考えて嘲笑するのであれば、それは根本的な間違いだ」（陳珍玲 1935: 3420）というように、総じて社交的な女性に対し、寛容な態度を示した。

むしろ積極的に異性と交流し、男女の自由交際を実践することを、『玲瓏』は推奨していた。「社交」や「交際」は女性が社会に適応するために必要な能力とされ、特に男性目線に対応することにおいては積極的な意味をもった。創刊号に、梁佩琴女士は「私の交際」で社交の重要性を次のように語っている。

女子が家庭から社交の場へと踏み出して交際を行うことは悪いことではない。見聞を広め、社会の真相と男性の内情を洞察することに役立つのだ。以前の女子は常に男性に近づくことと人目に晒して活動することを恥だと思っていたのは誤解で、旧礼教の弊害だ。（梁佩琴 1931:10）

ここでは、結婚制度に包摂されないことよりも、異性との交際において冷静な判断力を失ったり、従属的な関係に陥ってしまったりすることこそ、女性論者たちの心配事だったようである。それへの対応として、交際経験を増やすだけでなく、頭脳を鍛え、学識を高めることや、仕事を通して経済力を身につけることなどが、男性との関係における非対称性の回避のために提言されることもあった。

そもそも外見を磨くこと自体が女性論者から完全に否定されないでいる。「真のモダンガールは、ダンスと着飾ることだけに通じていればよいのではなく、交際以外にも、実際のスキルと知識について少し知っておかなければならない」（胡玉蘭 1933: 937）、「むろん、外見はモダンでなければならないが、……彼女の心および頭脳が最も重要である」（施莉莉 1933: 882-3）といった発言から、外見的魅力が肯定的に捉えられ、才色兼備のモダンガール像が求められていたことが見て取れる。

このように、「モダンガール」の外見重視に対する批判を裏返しにして見えてきたのは、異性との関係における非対称性を心がけながら、性的魅力を高め、賢く社交するという理想的な女性像である。先行研究が明らかにしたように、かつて「新女性」の外見問題をめぐる議論があった（何 2004）。しかし、それは「脱性化」（許 2003; 陳 2006）、いわば女性性の除去を理想とする側面が際立っていた。それとは対照的に、1930年代の人気女性誌『玲瓏』の議論から浮かび上がってきたのは、外見を介した女らしさへの肯定意識の芽生えとも言うべきものである。この頃、「新女性」に対しても、『玲瓏』では「自らの美を披露しよう」、「言葉遣いを鍛え」、「容姿を整えよう」といった提言が掲載され（李月瑤 1933: 1786-7）、五四時代とは異なる新たなイメージが付与されていく様子が見て取れる。次節では、これまでの論述をまとめた上で、このようなジェンダー意識の出現がもつ社会的意味について考察を行う。

5. おわりに

本稿では、1930年代の中国の女性誌『玲瓏』における「モダンガール」と「新女性」にまつわる言説を見てきた。誌面において、「新女性」は過去の女性運動の成果を継承する存在として、理想化されていく傾向にあった。他方、「モダンガール」は旧道徳からの解放という点において、「新女性」と同様に価値が認められていたが、外見重視という点からその奢侈性やエロティシズムを非難する主張もあり、「新女性」によって正されるべき対象とされることもあった。だが、「モダンガール」の外見重視への批判は、かつて「新女性」が浴びていたものと必ずしも一致するものではない。女性の外見重視・性的魅力の向上を問題視する議論の多くは、日常的な男女交際における女性の従属性の強化に対する懸念に由来していることが分析を通して明らかになった。興味深いのは、そうした批判言説を裏返しにして浮かび上がってきたのは、異性との関係における非対称性を心がけながら、性的魅力を高め、賢く社交するという理想的な女性像である。編集側は、女性の性的魅力の発揮を直接否定するのではなく、その必要性を踏まえた上で、学識や思想を養うことの重要性を説いた。つまり、才色兼備の「モダンガール」のイメージを求めていたのである。

このようなイメージの浮上は、ポスト「五四」時代における女性性への意識の向上を反映している。従来の研究が指摘するように、五四運動期では、しばしば「新女性」をめぐり、女性性の遠慮により「男性並み」の「人間」になる、という女性解放の理想を託していた（許 2003；陳 2006）。すなわち、性差を中和・除去する意識が当時の議論の中に多く含まれていた。しかし、1930年代になると、女性誌『玲瓏』のなかの議論から見えてくるのは、性差の無視や否定ではなく、むしろ女性の性的魅力の承認であった。そして、承認した上で、その女らしさが女性の従順さや自己性化に容易に置き換えられないよう、付加条件をつけたのである。

有力女性誌における女性性の遠慮、ひいては除去から承認へという変化は、言説の主体のジェンダー的再編が大きく関係していた。前述のように、1920年代後半以降、女子教育の飛躍的な成長を背景に、女性の読書市場が拡大した。一握りの女性知識人のみならず、初等・中等の女子教育を経験したより厚い層の女性も、通俗的な商業誌を介して意見を表明し、連帯を作ることが可能になった。こうした女性の読者層・書き手の下方的拡大により、ジェンダー論が従来の啓蒙論から一変し、日常的な関心に基づいて再出発し始めた。

一方、日常的な異性との関係に対する彼女たちの模索は、外見的魅力・性的魅力を承認することを前提としていたが、より大きな文脈のなかで言うと、その背景には母性主義への社会的関心の高まりがあった。1928年の学制改訂案で女子教育の方針に「母性主義」という語が盛り込まれ、1934年に「児童年」キャンペーンの実施、さらに1930年代半ば頃を通じた「女は家に帰れ」論争など、確かに先行研究が指摘する通り、『母性』を介した女性性への意識が高まった（坂元 2004: 121）。本稿で見えてきた『玲瓏』のジェンダー論は、「母性」とは異なる経路を辿っているが、女性性の強調という点では、当時の母性主義への関心と軌を一にしている。

ただし、性別役割としての女らしさと、性的魅力としての女らしさは、重なる部分もあり、区別も曖昧であるが、相互に強化させうるかは、定かではない。『玲瓏』の場合、特に「モダンガール」批判における2つの論理から見て取れるように、既存の一夫一婦制の異性婚制度の維持よりも、女性論者たちは広い意味での男女交際におけるジェンダー非対称の解消に努めていた。それは未婚・既婚にとらわれず、また世間の道徳が介在する余地もあまりなかった。

事実、前述したように、性別役割分業をめぐって多種多様な議論がなされた1930年代の中国では、女性の社会参加への期待が真に否定されたことはなかった。外見的魅力を高め、女らしさを承認することの意味は、必ずしも性別役割の強化に直結するとは限らない。また、たとえ家庭内においても、夫婦の権力関係に関する議論が同時期に展開されていたし、『玲瓏』のなかには、夫婦関係をめぐる言説や、家庭内における女性中心説の提唱も見られた。これらの主張が、ポスト「五四」時代における「母性主義」の台頭に対し、具体的にどのようなオルタナティブな可能性を提示していたのかについては、稿を改めて詳しく論じたい。本稿は「母性」とは異なる次元での「女性性への意識の高まり」を女性自身の角度から一定程度解明した点において、それらの問いに答えるための初歩的な研究として意義があると考えられる。

注

1) 「新女性」は、1918年に胡適がアメリカの女性を紹介する際に初めて用いた言葉だと一般的に認められている（楊 2016）。ただし、同時期に「新女子」や「新婦女」といった同義語も

存在していた。本稿では、当時の認識に基づいて、この3つの言葉には特記すべき意味の差がなかったことを踏まえ、特別な用法が見られない限り、考察を進める便宜上、「新女性」という名称で記述することにする。

2) 民国期の中国では、「modern girl」という外来語に対し、「摩登女子」、「摩登姑娘」、「摩登女郎」など、「modern」の音訳語である「摩登」に、「女性」を意味する言葉を付け加える形で、さまざまな訳語が用いられていた。本稿では、近年の研究動向に従い、それらを個別に見るのではなく、1つの問題系としての「modern girl」現象として捉えていく。そのため、文中の表記を日本語に準じて「モダンガール」という言葉に統一した。

3) 1935年の記事数がとりわけ多かったのは、同年に『新女性』という名の映画がヒットしたことが大きく関係している。映画がヒットすること自体、「新女性」に対する世間の関心が見られるが、その影響(86/170)を除いても、1930年代を通じて「新女性」言説は一定の数を維持していたことがわかる。

4) 時局が厳しい中、7年間も刊行を続けた女性誌は極めて少ない。当時、出版の中心地である上海で創刊された女性刊行物の中、この条件を満たしているのは『婦女共鳴』、『女声』、『女星』、『中華基督教女青年会会務鳥瞰』のみであった(荒・孟編 2000)。

5) 『玲瓏』のページの番号は1年間を周期に振られているため、本稿における引用は、「(署名 刊行年: ページの番号)」の形で表記する。なお、署名はそのままフルネームで引用することにした。ただ、編集者を含め、無署名の記事を引用する場合は署名を表記しないことにした。

6) 創刊号の誌面構成は「娯楽」、「婦女」、「撮影」で、以降1931年17号に「婦女新装」、21号に「体育」、1932年17号に「運動」、31号に「学校生活」、32号に「幕味 (Movie)」といった欄が徐々に設けられていったように、『玲瓏』では「モダン」の多くの側面を網羅していた。

文献

Beetham Margaret, and Ann Heilmann, eds. 2004, *New Woman Hybridities: Femininity, Feminism, and International Consumer Culture, 1880–1930*, Oxfordshire: Routledge.

程謫凡, 1936, 『中国現代女子教育史』中華書局.

江上幸子, 2006, 「現代中国的“新婦女”話語与作為“摩登女郎”代言人的丁玲」『中国現代文学研究叢刊』2:68-88.

———, 2007, 「中国の賢妻良母思想と『モダンガール』——一九三〇年代中期の『女は家に帰れ』論争から」『東アジアの国民国家形成とジェンダー: 女性像をめぐる』青木書店, 289-298.

———, 2018, 「近代中国の家族および愛・性をめぐる議論」小浜正子・下倉渉・佐々木愛・高嶋航・江上幸子編『中国ジェンダー史研究入門』京都大学学術出版会, 281-300.

何楠, 2010, 「『玲瓏』雑誌中の30年代女性生活」吉林: 吉林大学博士論文.

胡道静, 2000, 「1933年の上海雑誌界」宋原放編『中国出版史料現代部分第一卷下册』濟南: 山東教育出版社, 350-360.

荒砂・孟燕堃編, 2000, 『上海婦女志』上海: 上海社会科学院出版.

伊藤るり・坂元ひろ子・タニ・E・バーロウ編, 2010, 『モダンガールと植民地的近代: 東アジ

- アにおける帝国・資本・ジェンダー』岩波書店。
- 岩間一弘，2006，「主婦と職業婦人のあいだ—両大戦間期中国における都市中間層の形成」『史学』74(3): 277-317.
- ，2012，『上海大衆の誕生と変貌：近代新中間層の消費・動員・イベント』東京大学出版会。
- 何璋，2004，「1920年代中国社会における「新婦女」—『婦女雑誌』を主なテキストとして」『ジェンダ研究』7: 53-72.
- 小浜正子，2018，「中国史におけるジェンダー秩序」小浜正子・下倉渉・佐々木愛・高嶋航・江上幸子編『中国ジェンダー史研究入門』京都大学学術出版会，3-21.
- 孔令芝，2011，『從《玲瓏》雜誌看1930年代上海現代女性形象的塑造』台北：稻鄉出版社。
- 羅蘇文，1996，『女性与近代中国社会』上海：上海人民出版社。
- 前山加奈子，1993，「林語堂と『婦女回家』論争—1930年に於ける女性論」柳田節子先生古稀記念論集編集委員会編『中国の伝統社会と家族』汲古書院。
- Modern Girl Around the World Research Group, 2008, *The Modern Girl Around the World: Consumption, Modernity, and Globalization*, Durham, N.C.: Duke University Press Books.
- 牟田和恵，2010，「新しい女・モガ・良妻賢母：近代日本の女性像のコンフィギュレーション」伊藤るり・坂元ひろ子・タニ・E・バーロウ編『モダンガールと植民地的近代：東アジアにおける帝国・資本・ジェンダー』岩波書店，51-172.
- 坂元ひろ子，2004，『中国民族主義の神話—人種・身体・ジェンダー』岩波書店。
- 宋原放編，2000，『中国出版史料現代部分第一卷下冊』濟南：山東教育出版社。
- 孫娟，2017，「何以為家：民国時期知識群體理想居室建构」保定：河北大学修士論文。
- 高嶋航，2009，「近代中国求婚広告史(1902-1943)」『20世紀中国の社会システム』京都大学学術出版会，51-94.
- Tani E. Barlow, 2004, *The Question of Women in Chinese Feminism*, N.C.: Duke University Press Books.
- 陳延媛，2006，『東アジアの良妻賢母論：創られた伝統』勁草書房。
- Wang Zheng, 1999, *Women in the Chinese enlightenment*, Oakland: University of California Press.
- 許慧琦，2003，『「娜拉」在中國』台北：國立政治大學歷史學系。
- 許慧琦，2011，「過新生活，做新女性—南京国民政府对時代女性形象的塑造」鄧小南・王政・游鑑明編『中国婦女史讀本』北京：北京大学出版社，338-362.
- 許晚成，1936，『全国報館刊社調査』龍文書店。
- 楊聯芬，2016，『浪漫的中國：性別視覺下激進主義思潮与文学(1890-1940)』北京：人民文学出版社。
- 張愛玲，1944，「談女人」『天地』6: 14-18.
- 趙妍杰，2020，『家庭革命：清末民初讀書人的憧憬』北京：社会科学文献出版社。
- 趙雲澤，2010，『中国時尚雜誌的歷史衍变』福州：福建人民出版社。

(教育文化学コース 博士後期課程3回生)

(受稿2021年8月31日、改稿2021年11月8日、受理2021年12月3日)

ポスト「五四」時代のジェンダー論

— 「新女性」・「モダンガール」言説を中心に —

呉 桐

本稿は、民国期中国の女性誌『玲瓏』に注目し、その中の「新女性」と「モダンガール」をめぐる言説を分析することにより、女性の視点からポスト「五四」時代におけるジェンダー論の編成論理の解明を試みた。分析の結果、両者は旧道徳からの解放という点において、革新的な意味をもつが、「新女性」が女性解放運動の理想としてイメージされていたのに対し、「モダンガール」はしばしばその消費主義化した変異種としてみなされていた。ただし、「モダンガール」の「外見重視」に対し、多くの女性論者は外見の重要性を認めた上で、女性の自己商品化や男性への従属を警戒した。即ち、女性の性的魅力の向上に対し、性規範や婚姻制度への脅威よりも、日常的な男女交際におけるジェンダー非対称を懸念したのである。ポスト「五四」時代において、このような性的魅力に基づいた女らしさを肯定する論調は、「母性」とは異なる次元での「女性性への意識の高まり」を示してくれたものである。

Gender discourse in the post-May Fourth era: with a focus on the “new woman” and the “modern girl”

WU Tong

This paper analyzes the discourse of “new woman” and “modern girl” in the women’s magazine, *LinLoon* (1931–1937), reviewing the generation mechanism of gender discourse in the post-May Fourth era from a female perspective. The two images of women both have positive significance in breaking through old moral principles. While compared to “new woman,” symbolizing the ideal of women’s movement, “modern girl” is regarded more as its consumerization. With regard to the “coxcombry” of modern girls, most comments in the magazine approve of the significance of appearance, filled with warnings on women’s self-commercialization and affiliation to men. That is, they focus more on the inequality behind sexual relationships than worrying about the sexual deviation caused by increased female sexual attractiveness. This positive recognition of sexual appeal manifests an “enhancement of female gender consciousness” different from the “maternity” path.

キーワード：モダンガール、新女性、ポスト「五四」時代

Keywords: Modern Girl, New Women, Post-May Fourth era